The Japan Society of Educational Sociology

震災後の一時帰国にみるフィリピン系第2世代への教育戦略

―教会におけるフィリピン系コミュニティを通して―

坪田光平（東北大学大学院）

1. 問題設定と課題

本研究は，震災後のフィリピン人女性たちの一時帰国を事例に，女性たちがホスト家族と出身家族との狭間でいかに動態的に第2世代の子どもの教育戦略を意味づけているのかを，その限界とともにトランスナショナルな視角から記述・分析することを目的としている。

これまで東北地方は，1980年代以降，主として韓国・中国・フィリピンから来日，定住する結婚移民女性によって知られてきたが，「農村花嫁」としての結婚とその成立期間の短さによって「インスタントお見合い結婚」あるいは「家父長制」の維持・強化が強調され，家庭領域に潜む「人権問題」が盛んに言及されてきたことでも知られている（宿谷 1988，佐藤編 1999）。その一方，近年では既存研究が女性たちを従属的な地位に置き，「被害者」として扱ってきたために「多重に周辺化された状況に応じて，主体的かつ戦略的に行動する行為者」（賽漢 2011，p. ii）と捉える経験的研究が希薄であったと総括されているが，教育戦略を編み出す女性たちの資源動員の過程やそこにみられる主体性は，依然として可能性としての言及にとどまっている。それゆえ，女性たちを「被害者」とする支配言説からの脱却と同時に，第2世代の学校適応や学業達成をも含めて，女性たちがいかなる資源を動員していくのかを架橋する作業が目指される必要がある。そのことは，東北地方における「震災後の一時帰国」の意味づけが，「日本人の家族を置いて一人で逃げた…自己中の妻」（李 2012，p. 73）とする表象への懸念にあるように，教育戦略を再構築する資源としてではなく「ホスト社会の同化規範」を強調する逆コースを辿る傾向にあることからも，一時帰国を選択する女性たちのトランスナショナルな生活世界への理解を促す経験的研究は，今後重要な意味を持つと考える。

以上を踏まえ本研究では，震災後のフィリピン人女性たちを対象とすることで，一時帰国の選択をめぐる動態的な資源動員の過程そのものを描き出し，それを通じてフィリピン人女性がいかに教育戦略を再構築しているのかに焦点を当てる。

2. 分析の枠組み

本研究が対象とするフィリピンは，結婚移民の代表的な送り出し国として繰り返し指摘されている（Parrenãs 2001，Constable 2004）。その背景には，配偶者を海外先進国に求めることで，自らは出身階層の貧困あるいは離婚に伴うスティグマからの回避を可能にする一方，送金を通し，出身家族にも事後的な階層上昇をもたらすというグローバルな結婚戦略があり得る。Constable（2004）は，これを「グローバル・ハイパガミー」と定義し，結婚を通して国境を越える移民を位置づけた。またCharsley（2012，pp. 14-15）は，これら結婚移民には「①国際結婚のための移動，②連鎖移民，③第2世代の母国での結婚」の三類型があり得るとし，本稿で扱うフィリピン人女性は，その来日経緯から類型①および②に跨って定義されることになる。

注意したいのは，フィリピン人女性は，結婚によって国境を越えても，むしろ積極的に母国との紐帯を維持し，トランスナショナルな家族を形成しているという点にある（Parrenãs 2005）。女性たちは移住によって物理的な離別を経験してもなお，送金の義務を果たすだけでなく，一時帰国や情報通信技術を駆使し，出身家族との紐帯を維持している。そのことは，移民の実践が単にホスト家族への同化を意味するのではなく，出身家族とに跨る「トランスナショナルな社会空間」のなかで，経済・社会・文化・宗教・情緒的紐帯を維持する社会関係が生起していることを示している（Levitt & Jaworsky 2007）。このように，本研究ではトランスナショナルな視角によって一時帰国に注目し，その行為性に焦点を当てていく。

3. 調査地とデータの概要

対象は東北地方のI市である。I市は，漁業・水産加工業を中心とする産業基盤と，中国・韓国・フィリピンからの結婚移民が多く生活している点に特徴をもつ。注目できるのは，震災以降，I市のカトリック教会を受け皿にした教会組織による支援が長期にわたって展開されていることである。それによって，I市では2011年11月から，月に1度，正式にタガログ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

語ミサが開始され，教会のフィリピン系コミュニティ発足が目指された。一方筆者は，I 市のフィリピン人女性の「連れ子」として来日した 1.5 世代の学習支援を行っており，高校受験を終えた 2012 年 3 月にはその母親を通してフィリピン人女性のインタビュー（8 名）を実施した。翌月からは，フィリピン人リーダーを通して教会のタガログ語ミサと週末の日本語ミサに継続的に参加させてもらい，フィリピン人神父やシスター，日本人信徒にも聞き取りを行った。また，ミサ後は女性たちが起業した「お店（＝フィリピンパブ）」での参与観察と，非構造化インタビューを実施した。

4. 震災後における女性たちの一時帰国――資源動員の過程と教育戦略としての意識の表出

震災後，女性たちの一時帰国を捉える上で見逃せないのは，タガログ語ミサの開催によって地域社会に点在していたフィリピン人女性のネットワーク化が進行し，女性たちの起業・就労を支える資源として相互に活用されている点である。注目すべきは，日本人男性が震災を機に離職／失職するなか，女性たちには「エンターテイナー」としての経験を生かした「お店」の起業・就労がみられることにある。そこでは，教会コミュニティで知り得たフィリピン人女性，それも「水産加工」の現場が被災・失職した女性たちに就労斡旋がみられただけでなく，逆に日本人男性が失職した女性の側からも，起業した女性に自ら声をかけており，フィリピン人女性ネットワークを介した相互扶助的な就労斡旋が認められた。

ここで，「お店」という女性たちの就労の場を捉える上で重要なのは，それが興行ビザにより「管理／搾取される空間」とは質的に異なっており，女性たちの密なネットワークに支えられた「楽しい」場として構成されていることにある。とくに一時帰国との関連から注目したいのは，「お店」で働く女性たちは，「1 人ずつ交代でフィリピンに帰る」という戦略を採用していたことにある。この理由を，女性たちは「お店をみんなで守る／支える」ことで「みんながフィリピンの家族に会える」ということ，そしてその根底にある「みんなファミリーが大事」という「家族中心主義」（額賀 2012）の規範を強調して説明した。しかもこの規範は，それが「お店」で働きながらの「身勝手な一時帰国」や「他店からの引き抜き」の自戒として働き，「お店」の経営維持と連動する組織文化として根を下ろす点で注目に値するものといえる。女性たちの一時帰国において「家族中心主義のお店」の存在は，一時帰国における資源となっていたのである。

次に，こうした戦略によって成される一時帰国をトランスナショナルな視角から捉えると，それ自体完結したものではないこともわかる。第 2 世代の子どもを連れて一時帰国した女性のなかには，その教育意識に変容が見出されるからである。

すなわち，一時帰国によって第 2 世代の子どもが「フィリピン家族の一員」として認識されることにより，フィリピン人女性は日常的に「フィリピン人であること」を抑制するホスト家族の同化規範に強い葛藤を抱いていた。それにより，2 回目以降の一時帰国は，第 2 世代の子どもに「フィリピン人であること」を確認させるという別様な意味づけが認められたのである。とくに一時帰国を通して，フィリピン文化の象徴の一つとして行動様式に結び付いている宗教実践は，〈日常的な家族の結合〉を意味するものとして高く価値づけられるとともに，一時帰国の際には，専らそうした宗教実践を通し，出身家族との一体性を求め，「出身家族の一員である」という帰属意識の確立・共有を狙った教育戦略を実践していたのである。

5. 結論と課題

震災後のフィリピン系コミュニティの隆盛は目を見張るものがある。とくに，地域に点在するフィリピン人女性のネットワーク形成・維持の場としてのエスニック教会の役割は無視し得ない。とりわけそれは，一方では女性たちの一時帰国を支える連帯を生み出し，教育戦略としての意味づけへと一時帰国を再構成する女性の行為性へと結実していたからである。

しかし他方で，産業基盤の復興に伴う「お店」からの離脱を通して，教会コミュニティは急速に衰退していく。というのも，震災後も「お店」で働き続けることは，フィリピン人女性に付与されるネガティブなラベリングを強化し，とりわけフィリピン人同士の相互不信を引き起こすトリガーになっていたからである。それゆえ，その関係が引き継がれた教会コミュニティ内部では，「お店」の就労を継続する女性たちとの間で相互不信が芽生えていく。その文脈のもと，タガログ語ミサの中止が内部的に決定されるや，事実上，教会コミュニティは解体されたのである。

女性たちがアクセスできる資源としてのエスニック教会とのかかわりが制限されていくなか，今後，第 2 世代の子どもを取り巻く女性と第 2 世代の子どもの世代関係には，より一層の困難が予想されることになる（Foner & Dreby 2011）。女性たちの文化伝達をはじめ，いかなる資源，戦略が用いられ，第 2 世代の子どものアイデンティティのあり様がいかに規定されていくのかは，他のエスニックグループとの比較によって検討する必要があるが，それについては今後の課題としたい。

※参考文献等詳細は当日の発表資料に記載する

NII-Electronic Library Service